

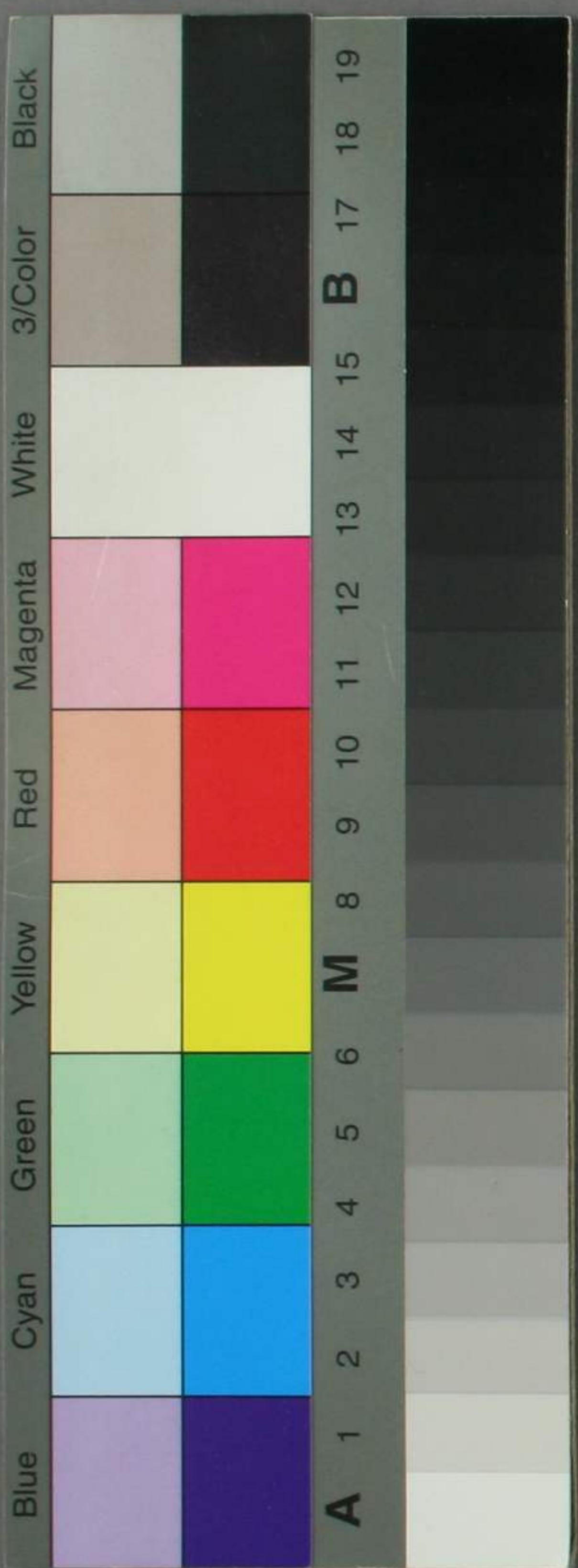
• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

安政見聞錄

下



71
3628
3



門 3628
號 3

新宿田 大學
25.6.19

安政見聞録卷之三

夜と朝て食人の死骸を捨て條

○ 人をもしくて信実と育てこそ。終才藝を無に達しとも信の心ある老へふて人をあくび。箇計りの工へ維ゆゑてかうねてとあぐらの勝手よきひゆく。實を渴て幸人ふ詔るべくアスゆく人も腸よりぬれどいぬ。日來みのれもうやう者あり。近づく已富貴うることを文る者多く实あり。一時その權を失うひ。落魄まれに及びて。親きの疎ありて。とぞ藝ひる者も。更に衆人の口ひとますと。世に狂く一とす。然るに程その好そとつ手とげ。貧富窮達に拘りざること。往來うる人といふ。又子兄弟ハ皆く拙く。支拂ハ元他人あり。されども脱れ支拂と云うて。互に信実を以てあひと。今きの入れ及をねどその事

に實あり不實あり。詔生と得する所ふると云ひて。まことに人
とて効くべ。又母の養へきをれより心懲にうつてやんまとて。奴僕
のどく。もひるす婦人あり。されどもまうる者毛に觸らず。もの不遜
无禮と責む。月往月来つて年と累積。ひに幸のぞくにうつて已ゆ
先礼るをもくべ。まもまと彼が乳性。今まと改むべうと。惜り難
いとぞ。老中人承とゆくまと。中人承下の支拂に有る。十
ふ七への教ひあり。然ども支拂の恩不肖。他うそ咎むきのみ
あらん。こそ箇やうのふ翁て信実あり。のべ稀う。用て燈行の轍り
と轍し。名難別の場セのく。え未被第。とく守る。不遼うゞる。婦
の不とき。また信の心あり。故に人の信不伝を禁せんと。ふく。平生の言
行とえてかるべ。お小北。所をふ。貧しく。一。支拂あり。幸のま

拂ひ支て。やま。まき。帰て。憐ま。假初ゆ
ける。去年十月二日の夜。大寝れあて。大小。従き。二人。従共れ。外の方へ立
坐す。その近きよう。火祭。その鄰ふ。火炎。覆ひかりける。ふぞ。
元より貧しき身のとある。せめて著換とへきを。葛縫。ざふれ。出
んと崩ま。家に潜り。そち。入奉う。て脊背。葛縫。を曳坐。けり。
まこと。火からだ。今少一。難具。と。持出んと。葛縫。と。妻に脊背。そ
近入るを。の時まで。梁の物に。支え。と。あける。のふ。毛うけん
男の上に。摺と。墮ま。嗟と。て。倒す。と。見え。が。死所。と。あ。や。その後
息の絶ふける。妻の大。小。従き。蔓へ立す。て。引記す。ふ。更。ふ。正。解。う。ぎ
まこと。大。あ。あ。て。救困。ひ。活。と。そ。の。甲斐。ふ。一。左。ま。る。ち。ふ。
ひ。近づき。そ。そ。の。家。に。移らん。と。妻。ひ。も。く。歎息。一。愁。ふ。そ。り



この死骸と大木橋までひ丈の死骸。今一個人のあくび捨ひてある
場と立ち去る。とてきとえきどこの擡ぎみて。誰と應まんやうり
な。おふ故てその婦へ脊脛、葛籠を身に下す。蓋とありて中
さる夜類残りあく掛出一掛支の死骸で引む一力で極め抱きあ
げて。かの鳥籠の中にひよ。蓋とみ一候と廻てまた脊に負けるが。
治ややかにそりと重くて他に物を持べきやうふ。残り牆一とれど
ども。その夜とゆて捨まきて。まづ火の服とてうけよど。今宵の發ぎ何
方とそ縁うる方ゆあくド。仕事親族の方へゆたりとも幸の
じ。野を送りのうござきなくねば。浅草祝多の裏ゆひの縁てある
寺ゆあり。まづ波入へ負やさんと心細くゆで一個。浅草川の端に坐す
より御こと吾妻稿をこごさんとせーとて。紫二十口五うる。跡れ

ちり先ゆなう。來かしらずをみ。女の身を入りやう。身自然と坐
真て苦一々人。身まで山多の老うるが。この所ふ親族ありて。今安否を考て
仰る己の方へ比翼の寝ゆ。身の崩ゆますをやあくど。かく遠方へゆ来
一々く。身とが未だ不器の人あまと。雅義とくすれ恩ひねぐと。身
筋と脊直て進ぜん。身身先に立て禮をうた。案内とせよと。女へ是
を頼りえられ。その詞と優一け。骨退きく面魂一僻ありと心れ推
し。身を志へ疏一け。身の身うち身にも換さる。大身の物の入る
べ。終所人ゆ仕せざ。との捨て衝くと。彼男へ終是と單め。吾と
怪しき者と稚一と。身のどう拒む。若然らばこの累ことまとまく
がふ。大切のものあく。かく身方へ質とす。心と安んじて身鳥籠
とくとく負せぬ。かく身も園招のとてふ脚うると身善根をあき

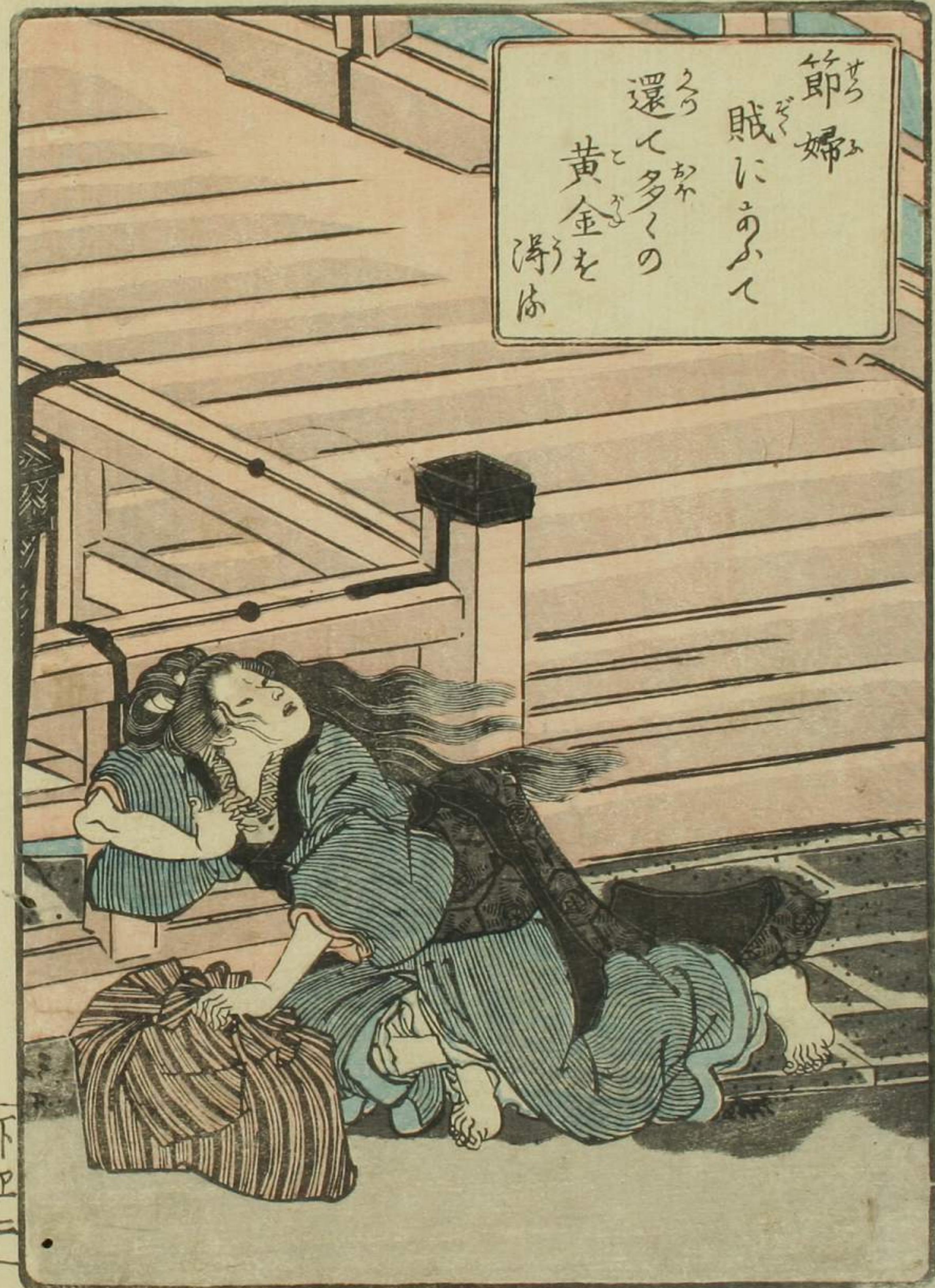
とありて心うるを深く教ふ。と後でことをと脊負人とひゆだ。女も今肩のきく婢るたゞくふらひけど。然まことに憐きことある。その口調に絶へり。妻時妻う房主とて休めん。憑こあくびとりひみて。鳥籠とす處へ下りまど。彼男へ立よそりと腰くとてまとを脊負ひよひの外に貴目あり。女の身せへ者へうけん。去來で豆あへ何方までも送り附さねといひあく。おる累と約のどく女ふうとせば要うれ申へあうねど衰る。女の方へへ者へうけん。おもて豆あへ何方までも送り附さねといひあく。おる累と約のどく女ふうとせば要うれ申へあうねど衰る。

一ヶむうの身うのまこと。ひじう重くあがむか。遠へ續みどろ入るや。やり失うひてへ義理ぬ済べ。とその結びやふ腕きりと小股へ脇と捨延ぐ。道をゆくと二二町。田原町と近い頃。かの男へ前ふ立ちが物のりそば振む。女と敵と対倒も。この何をうーきよ。となりひつを處へ倒まど。男へえりばかりて。被累と身奪ふと。女ゆそと心苦き力を窺ひて、累うち拂ひ在一次才と眞れかう。その拂うふとてその男よう。まの累三と複り。まづこの中で見て。後べとりへと集まつ。披き見るに藍緋の小袖一つ。そとふ表ふる紙色の室やうる。て取牛つ五六二束金にて二十両あり。女へ見て天小朵きりうふてちの大金を妻に預け。一のきく。と更にその放を解き。集まつる人々。まの頭と頬けて。まづふ人の死體でのまつる。鳥籠ならうとへかむよう。あんおと漏れて奪ひ。彼へ正しく盗械をまど。の累こもその始め。泥難の中ふへりを登こじり。うのまん。されば箇斗り大意の入てあらんとの事ひも考



二十二回

文乃義



二十二回

文乃義

らま。その葛籠の重げ見る。定めてよれの在人とありひ。その放ひと遡
んとあ。この墨にてとてあむなるべ。やとく純き空人とりへそえふかの鳥
翁あ。あん身う丈の死骸あつも。後ふ向きて忌こさふ溝垣をど
へうち逃ば。あん身が苦相の衣で持て持出へり。赤心も水の沫とま
ぐらへとさ。赤の墨みふかくぢう。大金のあるあまば。ことゆまこと
分ふまと。このまよへ捨あま。まづ此すへて私へて。公裁小任にあ
げ。と衆議一変へてもの統て。その筋へ私へけりとぞ。かくて空人があ
と。縁翁内岸の元傍に。あま持てあたけるが。葛籠に町名且持
きの名まへ祀へてあけまば。史どりて所の老尋ね来りてかの妻が禮
方を探へまへけり。妻の丈の死骸を得て。歎ぎと大さうめ死頬。

○
て菩提院へ葬る。そて懲懃に吊ひけり。かくて被空人の遺金の全く此
女が赤心じう。神の授けひとはくさんと下へをすと一うばまて歎び
りよく佛事を務へとあ

○
て小江都清草橋のきに負へく善し。舞支あり。若きうどん無べき
高人の廊に務めりと。深儀ある者あとぐを。あらじ
一が榮枯得喪の常のちうひ。そのうど年々これ極縁して。遙く召仕
りの小服をそそせ。この男も年未の奉公の空へくなら脱に服にう
けとく。泣くものあと立ち出て親の方へ岸りけど。親へこの時七十
歳をえまちうべ。志を活業なく。うと家に務め在りへじう。己が
給金へ遣りなく。こまかの老する父母に送り去りけるやどうる左今

かく流浪の身となつて。詫方うけとばら家ふ在り。一日貢えうる真子
と割りて僅ぢうりと被れ。畢竟方ふねやきて。價と卑く鬻た。
柳の枝かと得てその日と當とけるが。その父女老婦と人の多く
出入るを務ひ。同素右小左りへやどにこの男ゆきの工と心憂く。名ひつ
別小さくやうう家と借り。一人住ゆて暮みて割り。妻ありませ父母に
不自由あきやう小心を惹け。もの牙と相計りて。老父母を苦ひける。
然るにこの夜北辰を逝き多く家没と老矣男女壓と死ぬ。と
ほくふくを嘆心も空小憲ひ出で。かみ父母が居所へゆく。小のきまで大
小洋と足と入る。きやうもる。一傍こそ父母へ年老て足もゞ小弱け
主。室あて梁の下に埋りきけ。と胸躍り泣悲とて崩玉一床で
捨除け。ま誠え。深くおれへ到るに案のどて枕掛け。棟をみて

へ地にある。傍へと心も心あう。ば筋力に仕一本でとう除け。家の裡と
のぞき。妻をあげてゆ立まじ。きうに養ふる妻もう。きく人あうと
一由アえび。かくそ。逸早くこの所を逃出。一のうる。と妻時約湛
あうける所へ火の廻りとてうち張の挑灯を照。二三人来る。老あう
かの男へ妻をす。あめあに。從一老丈婦。何方へうこち退し。かく身等
かうてからするや。と向へば火の廻りの男養へて宿にすと枕巣といふ
やどれ。老丈婦のうち出一と長屋ある。甲乙。かく持拂えて徳と申れ
兩國橋の方へ逃う。さよと大う。怪我へあう。ド彼女を索ねまへ
り。彼男へ波ゆあへば。傍へ助う。かひーと夢と食せ。ふむう。妻
のまどて立處。さとよう。兩國橋のきにまさ。すかう。此如うとこう
るに。度小路と傳う所に。つぐうてありけま。男のうるう。確り



づき。嘗父母よむるふとて居のひーこそ燒け。と涙を流一歎ひ
かまる人の忤にあき。戸一枚と身を備りうけ。ここと敷きそ父母
載せ。まづ是にて安堵せり。とかの伴ひ出る人をも。索ねて厚く恩を拂
みや係りと去やうべ。半時ぢう在りける。稍に夜ふけて肌寒よい
に心蒸きて老父母の。さぞう。多く在まらん。とそとより再び父母が
位居し。奈に到り幸ど。聞く横一ツを先牛一肩にうけて出ると死す。
弟に出合て如故とのよへて告ぐ。その弟は兄ようも。お位居遠け
まへ。遙くうへるよへて陪禮。さそ緒共に度小路る。父母の忤に
まづお坐車と祝一ける。この弟は豫てよう。お別えとて妻ふあ。
殊にその所め北裏つゞく。位居へまぶ崩ハラミ。ほせ。とお坐車なるを
とす所玉て通語に呻吟あへと呼。父母のうちゆへ嫁と孫の弟の

上よ。家トツ。你へ頑カタマリ也。克て雅アサシきの。身のへを糾ツルらへよ。音ヨウくひふ
ありて。殊れ兒の傳副エスカバありば。りきう心ハシムあへとす。と兒も昔マサニに勧る
あ。さくとて方カタへ生ナシとまほ。兒へ終夜父母の傳トドケり。懷ハグすと離ハグすと
か。程カタマリうちの夜ヨメも明アキラまへに。主一椀の飯ミツを。とふ於て捨め
て心づき。僅ヒカルの儀マサニあり。二の聲ヨメドリ勤ハシムに心ハシムを懷ハグ。納ハシムもやう。並
坐スルて後アフタいこぶ。家と顧ハシムのとぬもあらば。父母の情ハシムを離ハグ。と一向に
念メモリトドケ。今ありへば夜ヨメの写シテ小處マサニり。かの儀マサニを離ハグ。と一向に
まつげ。らふふ今アキラ。まへり他カタに。離ハグ。まづ立タマニ。まづ立タマニ。離ハグ。ま
ら。殊ヒカルに衰ハシムの後アフタとて。捨端ハシムもやう。便ハシムくるの。と家の崩ハラ生ナシ
ふあらざれば。立タマニて。立タマニを。ふ育ハシムに。出ハシム。時ハシムのままで。何ハシム。

安政見聞録

思音

うりの男。男は父小故ひて殘の懷に。健むす。職とする候及び。親さる葉子。までも。参入しまで。差ひゆき。父母にも進め。内々も含み。且父母の近隣ある甲乙の恵ミよ。一時の飢を度せ。けり。夫婦の離れ。あらば。親あるの志。一。維くゆかあるべきなほど。夫災不勝の難あると。また。度未と。國も。すまう。金銀資財を先に。父母を後ふ。もろりのあり。もの男と。遠隔に。

國ふり天正の頃。何事と。士人あり。重く。貧窮。までも願を務む。然るに。性未金銀をねき。是と。悔あるを心に。折々。その黄金を生じ。書院に並べて。多寡を試。次第ふ鐘の。薬と。あると。死ある士人例の下。竹。黄。金。を。生じ。度き。書院に布滿して。人満面。笑を。會。三限。うき。樂。と。と。度。を。腰。や。ありける。さす。

か。人来つて。今組下う。誰。假初の宣擧。よう。脱ぬ。刀傷。以及。ちんと。も。頗来つて。然め。之。と。急。を。告。る。の。あ。つけ。も。人。啼。て。あ。稽。き。黄金を。納。む。に。贈。き。け。と。ば。そ。の。ち。小。て。も。あ。た。と。ば。そ。の車。被。是。縫。と。あ。ひ。て。徳。せ。ざ。と。そ。の。疾。を。順。し。翌。日。の。日。中。過。あ。や。く。縛。の。果。一。ぐ。そ。き。よ。う。躬。に。序。り。一。ぐ。幸。不。私。を。う。り。走。き。る。黄金。生。榜。書院へ。生。せ。」を。う。不。慮。に。躊。ぎ。の。始。ま。り。て。壁上。一。墨。痕。を。放。す。赤。れ。序。り。走。され。ど。も。更。に。そ。の。黄金。を。念。と。せ。ば。と。い。於。て。平。生。と。う。士。人。か。て。金。銀。を。榜。あ。と。ほ。む。ひ。と。陋。い。鐵。の。の。多。く。しが。這。回。の。と。不。あ。と。鐵。ア。リ。の。ま。ふ。は。と。籍。え。か。て。こ。そ。士。人の。志。あ。ま。と。人。こ。ま。と。感。じ。と。く。そ。の。車。ハ。美。あ。ま。ど。も。と。の。親。の。車。文。に。り。葉。子。棄。の。男。に。化。す。

○鼓者未矣と識るの條

俗に傳へり。古へ未來の吉凶を知る。且天變地狀を知ることと
神人と稱ゆるとぞ所謂吾朝安邦晴明誠の大神乎。どの類ひ
をり。唐山明の時堪輿祿令とそ人の吉凶悔吝を知る術あり。
或ひの鄙道人とのるゝ人の肌骨の裏を見て。その人の事と指し
まふ中らざる所か。是等なり。ある法術。世小僧なり。然が如きの
あし。但今の世人未だを識る。名傍と称する人。牛に二三牛はあと
あり。易易学ひ未然の工と。初學者より少と。學ぶ所甚一か
ぞ。俗情胸中に充満の。辛う覺え難い。不系師のよきの街す。四
方都とりの盲法師あり。誰人ふうもひけん。人ふきて半夢を喰ば。
或以てその人の吉凶を識る。但の法師が天性充他に傳へる人あ

下ノ八

矣。死るにこの人年くじ此術の精一くなら。人の為に益があり。已入
きよきと悔え。あたると見え得て。人ふ違どに。その人の吉凶禍
福胸にうかび。右流左きと。見え。忘れて。あくど。あきら。こま生
涯の苦勞たり。と歎息一つのひける。も。あふ文政十二庚寅秋七
月二日。今をきるて二十七年。その日申の時をも。に。東師大に
就寝す。洛中の土着築地みど。能む見る所ゆき。承承大を
作と。怪我せし人も少く。い。人を大に恐きをなし。家を走り
出で大道小巷を敷つ。夜の畜生と。補理して。ふ居る。二二日。
あひ。大寺の後肉にうち。その搖返と。過ふける。無る。二日。日
止ても。うそその名残をや。ひ。ふさむ。養ひ時く。あり。始め。ひ。臺教二
十度。うち。後又。逃げ。に。写遠くなり。七八度。よう。五度。に。走。ま

もうせ日ぢうりをとて。行ゆり止まをあつけよ。人々まどひ思ひ。そ
はくより忙農へ始め。大風へ中ちどづく。雷へまくどき。とえ。
是とりて神とすまご。始めらどの大農へみだりと。篠一ねまど。あ
はく。子小兒のさうひへ。つふとあへト頬うる。舊紀を舉てその理を。
に方ふ示しとそのひの頃。傷満山先生が著する忙農考と。人書
れの。この説を取て。生バ。始め大農ありて二日がわじと。至秋に二
十度も搖一と。る。去年十月に都の忙農。その後大小千度を
か。翌二月。五度。四月。六度。五月八度。六月。二度。十月二度。十一月
二度。十二月一度。十三月の兩日二度。十五月。二度。十六日。二度。十七
日二度。十八月。二度。この時少く。霄西。十九日。二度。廿一日。二
度。廿二日。一度。廿四日。五の。三月。一度。廿六日。二度。廿七日。一度。廿九日。二度。廿九月。一度。廿九月。一度。

下ノ九

この月。總計八十度のうち。重二十八度。夜五十二度。その外。へ紀すに。追
あはげ。夫。よし。る。遠く。なる。と。年。を。起。て。に。五。月。ま。で。折。く。微。動。在
ける。ねれ。の。波。残。あ。く。ん。こ。才。國。會。に。申。の。微。動。累。月。止。び。と。紀。と。
先。年。京。都。よ。り。或。人の。絆。ふ。送。り。誠。一。と。る。書。快。と。そ。人の。足。せ。う。ん。
そ。の。前。文。化。九。年。あ。や。十。月。に。日。あ。て。に。都。に。移。し。き。忙。農。あ。り。然。き
ど。由。家。崩。ま。じ。所。との。土。移。少。一。つ。學。の。り。よ。る。ま。で。う。じ。う。近。春。つ。よ
き。忙。農。あ。き。と。と。意。の。目。的。と。て。綻。が。る。忙。農。と。圓。經。五。分。と。一。系
部。始。め。て。農。ひ。一。と。圓。經。守。ぢ。う。ふ。圓。經。用。て。文。化。度。の。忙。農。よ。り。六
倍。と。却。し。一。う。以下。そ。の。目。的。ふ。慣。ひ。て。り。そ。或。ひ。圓。經。一。分。二。分。ま。く。七
八。分。の。り。も。あ。う。日。時。を。ま。く。記。して。そ。の。時。そ。の。忙。農。在。が。ど。く。覺。ま
ま。の。書。状。う。毛。そ。り。そ。ふ。遠。回。の。忙。農。京。於。よ。く。度。教。皇。審。く。見。

搖り處へうづ。さうけまと枕農考ふゆ。ひるとく人懼きて。大路に
卧そひの少み。因て日午橋へ何へ。とぞ大農の来る理あはせば。
安堵へと氣に入。愁うる。後く夜免ふ祀きを病に罹らんといふを
特し。國字と附て臺教にも。安きやうに是と詠せり。余も往かつて
小見とえて。主人の至誠を感じ。また文政の慶承朝の枕農ふか。四方教
との育法師。朝見てねの事と。大不況り。僕と。今日々それ
調子取ひて。かまはず災ひのあらん日うつ卑く朝飯をあらわ。邊誠
の方へ伴ひゆけ。僕も豫てうへ。づく。意得する。とむ生び。急ぎ
き人に朝飯を送め。その身の側に食ひをまわ。頼て多くて拵え方
のと急ぎ。邊誠のきへ。まつて。四方教。おも。安堵せ。そひ。此處にて
て。も。調子うえ。さうがる。きふ。光るにあらじ。愛宕の傍。何。亲へ。年

素の氣色あつて。你の知る所。さう。とく彼處へ併えとの。僕。言をぬ。
書案れ。並。かの傍の洋へ。や。傍へ。とて。行つ。何。あ。う。と。早。參。
素。と。や。と。向。け。ま。四。方。教。参。て。ま。と。よ。今。日。の。調。子。室。一。う
ば。や。す。ふ。象。中。城。都。せん。と。モ。然。ま。と。の。被。あ。た。を。人。ふ。り。べ。き。事。か。う
ね。ば。ま。づ。我。の。三。教。と。出。て。邊。誠。の。方。小。至。ま。ど。も。櫻。調。子。の。徳。ま。る。ゆ
え。の。所。ま。で。来。り。と。大。息。ゆ。て。ひ。け。と。ば。傍。も。私。と。の。鄰。考。が。傍。と
望。こ。ば。うち。強。き。ま。づ。是。下。が。心。重。い。何。の。愛。と。奈。り。る。署。ま。も。草
との。ひ。け。る。に。方。教。傍。て。我。む。と。元。ま。あ。き。ご。教。り。ざ。一。十。七。八。火。を
ま。く。う。ん。と。妻。時。あ。り。て。ま。く。考。へ。ほ。ま。と。世。处。あ。て。も。調。子。う。ひ。て。全。く。安
堵。ま。づ。今。づ。一。る。き。所。へ。あ。り。ま。と。と。乞。け。と。ば。傍。へ。傍。て。是。う
す。も。う。き。と。く。の。獲。摩。雲。な。り。彼。外。へ。見。て。え。よ。と。の。四。方。教。悦。び。ま。

もひきとて。その嘗へ至り。また御全く曉ふ者も居ざ
ナ。そは仰あらむ。安樂にて居る。その日申の刻遅る
暴れ大忙農勤とて。かの復興堂へ渓に宿す。四方を主僕にて死し。此
師少弔を覺えて。人の吉凶悔咎とぞ。その所十にて。ハ九へ必
外るとな。然る小己が配場ふ至り。ことを知る所にあらず。還
て御子をつゝて。安樂へゆく。研くらばや。或人をとを仰げて云ふ。
ヒヨモ極の理なり。吉の極まる所。凶の極まる所。吉う。喻
ハ陰極まつて。陽を生ずるべから。脱必死の場に及んで凶却
吉ふ。或ひハ九既一生の病人をトモル。乾為矢及び火を奉る
ど。吉卦を得。きび妙く人。こよと吉と一数べど。こよと凶卦
モ。その人命活ぐ。是彼吉極まつて。凶に蒙がる所あり。バを處れ

ひうて平こうゆ。更に變えとて

○地下す火と發するの像

遠田地裏のとき。地下す火と發するの像
彼等地裏より出で。急ぎ外の木生る。小麥の方れ盡
りて大ふ光りと聲も。但電のみくろ。その幅何十丈とも量り
ざれが一面小火氣も。須臾に消る。さて地中の大氣發して
光りき。他所まで光りの眼ふ遠アリ。と/or人あまと。其
まゝの樹木など。底どける。光明に見ええ。殊ふかの天夜
て。恐懼のをすまと。大氣ふ。この光りと氣ぬるべ。池の鷺のどな
西北角くして。遙に本巣山の森ある。と。周てその光と霧に見え
個度下瀧浦小出で。泉の湧にあり人の活ふた都の方にあらず。

の。とくに四箇所ええげまど。尋事の福妻こと。もひ倣へてあらわすが。後
お受けばだ廢う。かの電のふえふるは。地中の火氣喫へて。うつゆ。是を
そぞろと見へ。世俗にひ。需要と同理と。うゆ。理へくべと。語アモ。思
ふれ陽氣陰氣迫めり。も。樹被りそ。癡生ると。衆ひ勤くと。理の
事。う。ひとび人の瘧を病ひ。素不陰氣薦て。こよ。が焉に惡事。火。裡ふ
熱を食とて。既に。安せんとも。實上。ど。由素の陰氣に。用らせて。癡生
を得。ば。こ。ふ。故て。身體を廢ふ。と。稍ち。まづくと。熱癡生すと。既に
ひ止むと。世界ふと。火廢の理と同じ。死き

接ぎるに試て。かくの象と作ると。和漢二才固念に哉。あり。
まづ二と叶を容れ。桶に覆盆を擎り。水を投げ。底の情に鍵には
をつけて。投げ下る水を生じ。縱べ流れる墨の如き。人氣をその鍵

次入まに教人相交うて十分ふゆつと急ふちの達口を塞ぐ。則
氣息の陽陰小通キニやんと歎モチと桶獨り哀マツひ効く。ちの陽盡は
もとより衰止むなり。小児コノシタス誠是と云る所マサニにて。その理をくゞぎ
と考えたり。この法ハタクはまだ試トトロひざまども。寺鴻良安が記メモを貪アラム渠

さて。北辰後十日。二月を経て。晴夜四万に先りと發し。驚びて電の
如き。ものよりもの頃人ふ語るに。ことを云ふる者多一。因て又ふ忙中の陽
氣脱に大ふ余きとひぐども。早速盡く生褐をま。その名猿毫夜とも。
即くふ奈まるを。是へ大陽の光りに見えば。夜のこどもとをやぶるこ
も。さく岳にも。そそぐふ。その先を何處と定まづ。今その身の所
は土砂うち。火も。火發するやうべからと。を處ある人の御さむ

の三

○神明焉民を憚之の條

ちの頃誰りとぞ。東ら風旋せ。ハアの大震にあひて。渾身傷損
ゆ。況て今セモ廻さる者。ま。神明の加護によき。因てその
役を入るに白き毛長二寸。あるいは。と。併勢。皇太神宮の
弊へより新あ。あの毛ありの災害を免る。と。併勢。皇太神宮の
下著用の衣れの役。白毛。見えぬ。の。支く。あ。そ。よ。く。の。と。要
あ。ぐ。び。と。り。ひ。継。ぎ。語。う。き。世。上。と。と。と。か。く。ぎ。う。り。の。か。然。き。ど。ゆ
億兆の人民。盡く。愁る。に。あ。ぐ。び。あ。と。む。ま。く。不。例。う。え。未。我。邦。を
神國。ち。貴族。上。の。人。下。の。神。物。の。擁。護。に。う。て。榮。ス。き。め。は
あ。も。も。皇太神宮。よ。授。け。ま。白馬。の。も。あ。り。と。り。余。づ。知。已。某。あ。

下ノ十三

老人。深く信する。こと。あ。そ。この。と。て。教。い。そ。か。内。あ。び。近隣。の。男。女。の。被
を探。らす。に。支。く。二。の。毛。出。ふ。け。長。さ。毛。七。寸。五。六。分。白。く。と。て。證。あ。り
と。そ。夫。神。明。の。口。計。ら。ひ。元。氣。を。り。て。残。る。べ。く。じ。遙。く。る。神。代。う。
中。古。近。世。に。及。ぶ。ま。さ。あ。ぐ。の。奇。い。き。と。あ。粗。正。史。に。も。載。す。と。六。才。
て。疑。ひ。經。べ。く。じ。

按。る。れ。天。保。年。中。ゆ。併。勢。山。底。あ。り。と。り。と。て。流。行。徳。五。の。人。民。老
少。を。り。そ。ば。併。勢。の。宗。廟。不。福。る。と。數。千。毛。と。り。を。か。く。じ。固。て。道
路。を。燒。の。鞆。へ。そ。の。疲。勞。で。枝。ん。と。或。ひ。へ。馬。獲。を。出。し。て。こ。と。と。ま
せ。熊。裏。を。出。し。て。愁。ふ。食。り。毛。革。鞋。を。旅。一。酒。飯。を。旅。そ。こ。の。放。れ。
旅。の。盤。頭。を。旅。じ。て。出。る。者。も。行。路。脚。の。難。あ。ぐ。本。百。里。の。往。返。
不。寧。と。關。じ。因。て。少。人。女。と。り。ど。す。欺。き。犯。さ。ま。と。更。れ。み。一。安

ふ神明の冥惠にあらびく。形のどれに及ばんや。但社古よりこのる
教度あり。大抵六十年に一。一度行ひるとひよも。まこと不聞きす。所
に天保度の山莊余りの節。何方ともうへ。太神官の大麻空中より
降り来る。一渺小蓮る。ま下その内中ののみ一人。系官を企て。心とも
うきあむことを。是を吹傳へてゆきとゆくとせるよう。發ふ一那に
及び一玉に及がま。武人伊勢の山田に飛り。か太麻翁箇りゆ
き。降て町武の屋上に墜る。人々不測ふむ。伊勢の神皮に向
ふれ。かの家くれあひて失うる太麻一箇もまーと。實に神變
の不可思議を識るとぞ。まことに中國歌舞ふ多く隠りてその
跡より。誰とぞ。秦緒を捨め。東幽西幽北陸山陰。陽のふく。
奉つて。宗宮まーげりとぞ。遂へ近き世のとあへ。誰くゆく如

ま。國の神社に佇勢より外
あるとき、近小遠國の天災ふも。この神の護つより更に所謂あ
きよあらひ

或人達て議論を立て。この工を諱つてひそかに。とま
懸け。また。この天災を免らへんが。彼は老なる。さくふ。或ひ。橋た
れ。或ひ。壓死の。ち。負少みうづ。さと。神明入ふよりて。眞實あ
のふ似たり。遠の例の寄をねむ族が。ひむる虚言あらん。か
のこひき。亦如何にて。社小毛のありやとなりえ。遠の名々に天保壬
申諸多ぬ作きし年。東都小毛を兩せ一とあり。今猶その毛を
藏する人あり。その頃世寫の風貌に。或人歎の毛を晒せ。ふ。大風
来。毛をとを掛け。普く兩せたり。もど。柱にひあり。一。全。

左相の事あらば。天地不正の事あらうて。かのどきことあるなり。
脫れ唐土小國の例あり。唐の咸通八年七月下邳に沸陽を雨乞
て馬鹿と殺し。宋の端平二年七月。邑を雨せることあり。元の至元
二十四年。土を雨りて七疊被ふ。深きて七尺。牛畜盡く没死
す。その修肉を雨一穀を雨ひ。舊史に従く見る所何ぞもせず
兩さざらん。元より怪しきむれ坐りのす。その際するモ邂逅に人の殺
入らたり。と車のうげふ議論せり。む和漢の古例を引き。そのりよ
所確論めきて。多く人毛で伝服ひ。然きども車と毛毛毛。毛習天
保度毛を雨乞ひ。或人西城の書れ致へ。毛頭微鏡をりて毛を熟
視し。毛毛にあらざることを知り。毛の鱗を一紙に上木。如己の人毛
焼り一とあり。余毛一枚をぬりてしづ。今遺失して附近にみ。周て晴
る。

紀のまで。舉ぐる時候不湧みて。夏月大小陰莖掩ひ。教日を
経て日光をえま。周て不時の冷氣行ひ。毛稻穀登つて死れ
至は。此時活雪の中に寒を生じ。その貌毛のど。とお長さす依
よう。二丈に及ぶりのあり。然るに風のあふ吹き北より墜。南
草木の精液を吸ひ毛ひ。こりて稲粱以下。菜蔬の類ひ。も
熟せ毛。國土帆籠ひ及ぶなり。西城の毛小此とあり。この寒をゴスサハ
とり。這圓障一毛とづれば。則らゴスサハアル。頭微鏡みて毛とて見るに。
脊れ七への寒熱ある。たゞバ韓のど。にとむぎ。所毛あり。全くな
毛にあらび。蓋全體の毛宣毛。多く毛毛に毛て草て。班文のやき在
とど。微少にて。その形妙り。とて。かまが遠回人の役に。在と。大
に異なり。後の識者の考へを俟

○ 崩土中より多く生ずる條

安政二乙卯四月初旬石久一赤地より崩を生じての数萬千本となり
を初び農民の斬殺をりのと報せ。二十五万七千株もとどりもの
崩減ドアトリをえび畠に入りて麥を食ひ大豆小豆の蔓と呼ぶ
久。然はに翌五月小至り。何方ともうね干の触来つての崩を
逐々極に大半を減ぞと。個ある触何より来るとりを北向
君主。どん人のりもく海中より忽然として出たると。かる奇譚也
世に傳ぐ。土人のりもく去年甲寅。國中に竹実で生むると許多之處
五石修石をぬて食用とす。而して名ふる崩へ竹実の土中に埋
化してかゝる神が用の頃ふ竹实の殼を頂くりのあく土中で生て動
くふ従ひその殼自ら落らるゝ。

按るに廣の弘道の初め梁殿の舍ふ大崩あり。長二尺餘在

上けるが猶の爲不確もと。子時救百亂忽然と來て。かの猶と嗤
殺し少選あつて崩を覆む。州人を遣りて大崩を捕へうち
殺して止ぶ。まづいこまよと。このる日本文ふ異あまとどゆ崩の因
によて縁ひ

○ 蝦蟇巨蛇と鬪ふ條

下総の土人の話に。同七月十六日。下総相馬郡大原の里ふ一丈口五尺の
巨蛇出る。このとき丈八九寸の蝦蟇出てこまと鬪ふ。互に雌雄を争
まると。人これを奇きとて。以傳へ來て見る。幾百といふと
らば。然るにその夜強ひ及びて。齧開ひて。咬せば。觀る人傍に呆立す。
かく。夜明て観るども。聞ふかくて十八日前を。みの刻ふ立つて巨蛇

死せり。蛇裏（がま）ハ行方（ゆきがた）を知（し）ばしを

按るに新漢（しんかん）ニ才圓拿（ばくわん）ニ。蛇（へび）を咬（く）ふ裏（まぐさ）あり。文字集界（ちゅうかい）あり。

ハ蛇裏（がま）うり。大さ腰（おもてこし）のど。鯉蛇（りゆへび）を食（く）ふと。若此（よし）うりと。若人

小輪（こりん）の長大（ながひ）うり。若れ

安政夏園錄卷之二下

下ノ十七

安政三歳次丙辰初秋發行

服部氏藏梓

